

文化芸術による復興推進コンソーシアム
平成 27 年度 第 2 回 運営委員会 議事要旨

1. 日 時 平成 27 年 11 月 13 日(金) 14 時 00 分～16 時 00 分

2. 会 場 銀座ブロッサム中央会館7階 集会室ローズ

3. 出席者 運営委員:

本 杉 省 三 委員長
大 石 時 雄 委員 齊 藤 眞 美 委員
大 澤 隆 夫 委員 田 澤 祐 一 委員
荻 原 康 子 委員 半 田 昌 之 委員
小 野 澤 隆 宏 委員代理 松 本 辰 明 委員
菊 池 和 憲 委員 (委員長以下 50 音順)

参 与:

佐 伯 浩 治 (文化庁 文化部長)

その他の出席者:

田 村 寿 浩 (文化庁 長官官房付 文化活動振興担当)
桜 井 俊 幸 (文化芸術による復興推進コンソーシアム 東京事務所長)
渡 辺 一 雄 (文化芸術による復興推進コンソーシアム エグゼクティブ・コーディネーター)

4. 議 事

(1)本杉議長より開会の宣言があり、委員現員数 12 名のところ、出席委員 10 名(代理出席 1 名)、委任状提出委員 1 名となっており、本会議が有効に成立している旨の報告があった。

(2) 議題 1「平成 27 年度コンソーシアムの活動報告」

1)東北センターのプロジェクト創出事業について

「民俗芸能」は、相馬市で 9 月 25 日に行われた地区説明会の様子を一つの事例に挙げ、「民俗芸能を継承するふくしまの会」の経過が報告された。

「文化施設の連携」では、石巻市の複合文化施設の勉強会に関する経過が資料を基に報告された。

2)東京事務所の活動報告について

東日本大震災の復興推進に係る、イベント協力、広報活動として「新しい東北」および「三陸国際芸術祭」等への協力が報告された。情報収集・発信として Web サイトのアクセス状況、Facebook の閲覧状況、賛同登録の現況等が資料を基に報告された。

・本杉委員長より、コンソーシアムの活動とは関わりのない部分として、いわき市で開催される「アサヒ・アート・フェスティバル」について質問があり、荻原委員より全国の様々な市民団体や NPO が年に 3 回浅草に集うアートフェスティバルからネットワークが形成された経緯、東北の団体も多数参加していることから震災直後にこのネットワークが機能した概要、今回の報告会が東北で開催される理由等が説明された。

・大澤委員より「音楽の力による復興センター・東北」の活動として、復興コンサートが 500 回を迎えた写真展が仙台で開催されることが報告された。

(3) 議題 2 「これまでの総括および報告書の作成について」

今年度の実施計画の一つである、これまでを総括する報告書の発行について概要が説明された。委細として「これまでコンソーシアムが集めてきた情報や資料から記録を残すこと」、「コンソーシアムのこれまでの活動を振り返り、どのような考えやノウハウを辿ってきたのか多様な観点を時系列にまとめること」の 2 点から執筆されることが資料をもとに報告された。

- ・本杉委員長より 5 つのキーワードをつなげて構成している点は良いと思うが、これまでの活動経過を具体的に重ねながら執筆するようにとの意見が出された。
- ・半田委員より岩手県・宮城県・福島県では、都市計画が物凄い槌音で進められており、その中に文化や歴史の要素が本当に感じられるのだろうかという問題が提起され、震災から 5 年が経過してもまだ文化芸術による復興は、始まっていないという感想が述べられた。
- ・大石委員よりいわき市は住民も増えて、アリオスの稼働率は高止まりしている一方で、文化芸術的な部分に全く興味を無くしつつある人も増えているという感想が伝えられた。地域の住民が少しずつ日常生活を取り戻していく中で、政治的、行政的な課題、生活の課題から文化芸術が置き去りにされているという厳しい空気感は報告書の記録をまとめる上で報告しておきたいとの意見が出された。
- ・田澤委員より震災直後から各芸術団体も被災地域に入り支援活動を行ったことを振り返り、震災直後は現地に対応できる人がいなかったこと、そして、支援活動は現地から喜ばれる一方で、現地との生活のギャップから来る支援の難しさについても感想が述べられた。今は、求めがあれば何うが、地域の人に日常生活を取り戻していただくことが優先で、本当の支援はこれからではないかとの意見が出された。
- ・荻原委員より GBFund でもこれまでの検証作業を進める中で三陸国際芸術祭等を見ていると、東北の力強さが感じられる。東京から自分たちが支援に行くというのはおこがましく、皆さんの取組の価値を発見させていただいているという感想が述べられた。しかし、地域の文化価値を外から見た人間だからこその視点や言葉で伝えていくことは、今後も続けていかなければならないとの意見が出された。
- ・菊池委員より陸前高田市の現況として、まだ高台が整地となっていないことから仮設住宅に住む人も多く、日常生活を取り戻すには時間がかかることが報告され、支援はこれからであるとの意見が出された。
- ・本杉委員長より本当の支援はこれからであるという複数の運営委員からの意見を受けて、報告書がこれまでを振り返ると同時に、これからの方向性や示唆を含んだものにしてほしいとの要望が出された。

(4) 議題 3 「今後の運営について審議」

事務局よりコンソーシアムの今後の運営を協議するにあたり、これまで事務局会議の中で協議された経過およびアンケートを通じて関係者から頂いた意見について資料を基に報告された。経過の中で、文化庁からの方針として、現在の委託事業の形は今年度をもって終了すること、現在の事務局は解散し、事務所は撤去されること等が報告され、「文化芸術による復興推進コンソーシアム」をどのようにしていくか執行機関である運営委員会の中で検討し、方針を決めなければならないことが説明された。

- ・大石委員よりコンソーシアムの任務は、今後もあるとの意見が示された。敗戦後に建てられた多くの公立文化会館が老朽化し、1980 年前後から建て替えが始まった。高度経済成長の影響もあり、舞台芸術に最適な鑑賞と創作の施設整備が求められ、自主事業においても、鑑賞だけでなく創造事業の有無が評価を受けるようになった。いわば、地域住民の視点ではなく文化芸術の視点から施設整備と事業運営が今日に至るまで行われてきたと言える。しかしながら、東日本大震災と福島第一原発事故により、地域社会が危機的状態になったことを受けて設置されたコンソーシアムは、被災地で生活する人々の視点に立って文化芸術活動をすることが求められた。そのことで、文化施設や文化芸術が地域社会に果たす役割とは何か、災害時に役に立つ活動とは何かを強く考えさせられた。そして、将来起こる大規模な災害に備えて、これからど

のような施設の整備が必要か、どのような施設運営と事業運営をするべきかを理解した。

しかし一番の課題として今後活動を継続するためには、組織の運営(総務管理費)を確保しなければならず、組織としての運営が叶わない場合には、「いぎ鎌倉」のように何かが起こった時には、コンソーシアムに関わった方々のノウハウ、知識、人脈を招集していただければ馳せ参じますという状態にしておくことは、最低限考えておく必要があるとの意見が出された。

- ・半田委員より文化庁が「文化芸術による復興」ということで、このコンソーシアムを立ち上げた意義は非常に大きかったと思っている。しかし、「文化芸術による復興」という認識が本当の意味で広がったのかと考えると、その背景をきちんと総括していくことも含めて、まだまだこれからではないかと感じている。文化財レスキューも国立文化財機構にネットワークを残した経緯もあり、このままの形で文化庁がこのコンソーシアムに積極的に関わり続けることが難しいという事情も理解できる。組織はどうかであれ、コンソーシアム自体を持ち続けていけるような叡智がすぐには出せないが、先ほどの石巻市の文化施設の事業報告を伺った限りにおいても、ハコモノではなく地域にとって相応しい文化施設をどうやって後押ししていくのか等のコンソーシアムの任務は、まだまだこれからだと思っているとの意見が出された。
- ・田澤委員より、運営委員会には皆手弁当で集まっており、情報交換の場以外として、このコンソーシアムから事業の要望等が出されたことは、これまで一度もなかった。芸団協としては、独自に被災地を回っており、手厳しいようだが、このコンソーシアムがあろうがなかろうが、これまでと何一つ変わることはない。お呼びがかかればこれからも伺うつもりはあるが、各地域が少しずつ自立をしていることを見てきた今、これからの本当の任務なのではないかと思っている。活動資金については、事務局が独自で方策を考えるべきであるとの意見が出された。
- ・荻原委員より今ここで問題となっているのは、率直に言えば事務局をどうしていくのかということである。この復興支援という一つの旗の基に集まって出来たネットワークは、事務局がなくなっても前提は消えない。ここで蓄積されたものをアクセスできる状態にしておくとか連絡を取り合える状態にしておくという基本的なことは必要であるが、それらの現実的な方法について運営委員の立場から無責任なことは誰も言えないと思う。例えば、事務局機能を各団体で持ち回りにできるかと問われた時に、私どもの組織のミッションとマンパワーの中にそれらを持ち込める自信はない。最低限続けていける努力ができるのか、すべきことが何であるのかは、現在事務局を担っている皆様が検討すべきことではないかとの意見が出された。
- ・菊池運営委員より任意組織として資金の負担がかからない形での継続を望むこと、文化庁へも5年で手を引くということではなく、継続できる形の関わり方を一緒に考えていくことを希望したいとの意見が出された。
- ・本杉委員長よりこれまでの事務局会議でも話し合いを重ねているが、コンソーシアムとしての任務を遂行していくためには、資金確保が必要であり、資金をどうするのか、今後1年間は可能性を探る期間として今頂いた意見等も踏まえ、結論を出していきたいとのまとめが伝えられた。
- ・桜井東京事務所長より、今後継続していく可能性も含めて、助成金や水面下での協議を進めてもよいかとの質問があり、運営委員長からは賛成の意見が出された。松本事務所長からは、助成金をいただくためには組織体制がしっかりとしていなければならない、どこかの団体が代行することも考えられるが難しい点もある。運営委員会では、組織のあり方について明確な方向性は見いだせていないことから、資金のかからないゆるやかな連携組織を維持する中で、助成金をもらうという実現性があるのかどうか検討してみたいとの意見が出された。
- ・最後に大石委員よりプロジェクト創出事業の「子ども」の分野について、いわき市の現状が報告され、芸術教育の提供等でも運営委員会組織と、この場を借りて協議していきたいとの意向が示された。

次回の運営委員会は平成28年2月25日(木)午後開催されることが確認された。